図書館だより

第 18 号

昭和59年11月15日

愛媛大学附属図書館

目　次

○図書館を考える⑧……1～4
（新しい情報……1～2）
（情報を捨てる能力……2～3）
（読書のすすめ……3～4）
○書物が帰ってきた……5
○第31回 国立大学図書館協議会総会……6
○全国共同利用図書資料
（大型コレクション）の紹介(2)……7～9
○昭和58年度 愛媛大学附属図書館統計……10
○愛媛大学附属図書館委員会……11
○お知らせ……11～12

図書館を考える……⑧

新しい情報

理学部長　仙　波　　敬

国内はもとより世界各地の大学や研究所から、と言っても全体から見ればほんの極一部の所からに過ぎないが、それでも航空便または船便で多くのプレ・プリントが殆ど毎日のように研究室あるいは個人宛に送られて来る。このプレ・プリントとは、専門誌に投稿した論文がレフリーされ更に印刷される迄に相当の期日を要するので、それ迄に前もって自分の仕事を宣伝しておこうというのが主な狙いである。勿論これを作成しなければならない義務は少しも無いが、他所から送って呉れればこちらもと言う多少義理めいたものもある。しかし時には、こちらからは送っているのにそちらからは来ないではないかと催促されることはある。これらプレ・プリントの様式は大学により異なるが大体はA４版の大きさで、殆どが表紙もない甚だ簡単なものである。勿論、このプレ・プリントはレフリーされて専門誌に掲載が決定した論文ではないが、自分の書く論文に、これらを参考文献として引用することは許されている。従って、これには責任の所在を明らかにし、引用に便利な様に大学特有のプレ・プリント専用の記号を付記しなければならない。

このように、私の専門の理論物理学（素粒子）の研究分野では古くからプレ・プリントをやり取りするのが常識となっており、今では外国のある大学にそれを１部だけ送っておくと、どこの国の誰がこういうプレ・プリント（論文）を作成（書く）したという情報を世界各地に流すサービス機関さえあり、それを見て著者にプレ・プリントを請求できる仕組みにもなっている。

こういう情況だから、例え地方にいても専門分野に関する最新の情報は専門誌のカレントと相

俟って非常に豊富であり、研究に事欠くことは殆ど無い。

さて、ここで一番問題になるのは、これら数多くの新しい情報資料を手に入れても如何に消化して自分の研究の糧にするかであり、単に書棚に並べても机の上に積んでおいてもそれだけでは何の役にも立たず、かえって始末に困るだけである。

それでは、これらの多くの資料から最新の情報・知識をどのようにして頭の中に入れるか。いうまでもなく、読めばよいわけであるが一人では当然限度がある。そこで大きな大学（D.C.を持つ大学）で通常取られている方法は、D.C.辺りの学生を含めてその研究室のスタッフで分担して論文を紹介する勉強会を持ち、情報の吸収に努めるという方法であろう。

しかし、分業できる程の多くのスタッフを持たない小さい大学では折角の資料も宝の持ちぐされ的な結果になりかねない。それはそれとして、ここで、プレ・プリントの話を持ち出したのは、国際的な第一線における新しい学術情報の入手という点では、非常に注目すべき手段ではなかろうかということを述べたかっただけである。

〝図書館だより〟と言うからには図書館のことにも多少は触れなければなるまい。

国内で印刷されている有名な専門書を購入するために、講義をさぼって何時間も開店前の本屋に行列してやっと手に入れることが出来た想い出や、外国のものが手に入らず手書きのしかも質の悪い藁半紙にガリ刷したものが研究仲間の間に出まわった戦後間もなくの時代を経験した者から見ると、予算さえ都合がつけば、すぐに自由に殆どの書物が手に入る今日の時代が恵まれたものであり、羨ましい気さえする次第である。例えば、私は講義の最初の時間にその分野に関する参考図書を挙げることにしているが、余りにも多くのものがそれぞれ特色を持って次から次に発刊されており、しかも有名な外国ものも殆どと言ってよいぐらい翻訳されており、特別の書店に行かなくても入手が容易であるので、全部を挙げることが難しくその他と片付けざるを得ない状態である。

こういう時代での利用する学生の面から見た図書館の役目はなんだろう。その道の専門家が考えておられるとしても、上述のプレ・プリントという新しい情報の提供手段に関連して、新刊図書への速やかな対応もその一つであろう。本屋へ行けば並んでいる新刊書も大学の図書館にはなかなか姿をみせないでは利用に不便を来すことになるだろう。こんな事を言えば、実情を知らずにと館長さんにお叱りを受けそうな気もするが。

情報を捨てる能力

工学部長　鮎　川　恭　三

これからの世界は高度情報化社会になると言われ、実際、エレクトロニクス技術の目ざましい発展とともに、情報を蓄え、整理し、これを必要な時に必要な形でとり出すことも可能になったし、一般家庭でも、居ながらにして知りたい情報が簡単に入手できる時代も遠くないようである。しかも、これらの情報は、文字だけでなく、映像として物の形までも見せてくれる。『航空学辞典』（木村秀政編、地人書館刊）で飛行機の項をみてみると、「航空機の中で、固定翼に生ずる動的揚力によって重量を支持して飛ぶもので、推進装置をもっている。……」と定義づけてある。これから、われわれが知っている飛行機のイメージを作り上げるには、一つ一つの言葉がもつ意味をさぐり、どのような形なら空を飛ぶのだろうかを考えるなど、かなりな努力が求められる。映像をみれば、動的揚力などという判らない言葉など関係なく、誰でもその後は、飛行機を識別できるだろう。これは確かにすばらしいことである。しかし、映像はある意味ではきわめて多くの情報をもっている。飛行機をみて識別できるようになった人に、飛行機とは何かを書いてもらったら、それをもとに情報についての話ができるほど千差万別な答が返ってくるであろう。実は、人間は、その永い歴

史の中で、自然や社会というきわめて多くの情報をもった映像から、多くの誤りを繰返しながら、時には命をかけて、多くの答の中からそれらを整理し、その映像がもつ本質を追い求めて科学を発展させ、それに基いて技術を開発し、さらに、その中から生じる問題を追求して科学を深めてゆく苦闘を繰返し、その結果、科学技術の今日の姿があるわけである。

これからの情報化社会では、映像と共に、その本質を解説する文字、声とともに映像も送られてくる。われわれの知りたい情報は得られるのだから、これでいいではないかと言いたいが、未知のことを知りたい、さらにより良い社会や生活を求めたい欲求は尽きないだろう。そして、その欲求は、永い人類の歴史、地球の歴史の中で、一瞬のうちに生きるわれわれが、地球の環境を守って、先人の苦闘を無にすることなく未来へひきつぐ原動力となるものである。ところで、未知のことを探究し、より良い社会や生活のための技術を創り出すのは決して知識や情報ではないと私は考えている。それは、人間の考える力、とくに既成の概念を打破って今迄の人が考え得なかったものを生み出す力である。勿論、知識や情報は、この考える力を強め、また、誰かがすでに考えてしまったことを繰返す無駄を省くために非常に大切なものであることは確かである。

日常の会話の中で、多くの情報をもった人に出会うと何かおくれをとっているような気がするし、自分がより多く知っていればひそかな優越感をもつのも人情であるが、今の世の中は、情報が著しく氾濫していて、自分が必要な情報を求めるというより、知らないことへの不安が人の心を悩ませるようになって来ているのではないだろうか。映像や文字で知った事をそのまま陳列してみせることは、その人が優れていて新しいものを生み出す力を持つことの証ではない。はじめに述べた飛行機の定義から、多くの努力をして、どのような形なら空を飛べるかを考え、そのイメージをつくり上げ、何らかの方法で試してみようとすることの方が、ただ映像をみて理解するより、判らないことを解決し新しいものを生み出してゆく力をつけることになると思う。自分が映像や文字で知り得た知識を先人がどのようにまとめて来たか、そして、その先人がまとめたものから、自分がいまもつイメージと異ったイメージが生れないのか、先人の言葉で良いのだろうかを求め考えることが大切だと思う。先人の考えを学び、考え、それを自分のイメージとして固定させ発展させてゆくためには、多くの情報の中に埋もれることでなく、情報を捨て、整理してゆく能力を身につけることが大事だろう。この情報を捨てる能力を身につけるには、文字で書かれた本の中から自らのイメージをつくり考える力をつけることが一番良いように思う。文学書を読み、そこに描かれている女性が、テレビで一人の女優のイメージで固定されてしまうのはあまりにも悲しい。豊かな想像力と感性を養い、自分のイメージをつくり出してゆくために、本にもっと親しみ、読んでほしいと思う次第である。

読書のすすめ

教養部長　横　飛　信　昭

今年7月15日の朝日新聞に、つぎのような投書が掲載されていた。

「大学生諸君に本を読もうなどと呼びかけるのは、朝起きたら顔を洗おうというのと同様に馬鹿ばかしく、かつ失礼な事であると、ごく最近まで私は思っていたのであるが、それがそうではないらしい。……ある女子大生に聞くに、先生を囲んで龍之介や直哉を読んでいるよし。つつましいと言えばつつましいが、二十歳をすぎた大人がよくもまあ恥ずかしくないのか。そんなところは子供の時に、自分一人で読み終えておくべきで、手をのばせば入手できるあたりの本をわざわざ大学で習うことはない」（自営業・47歳）

まったく同感である。龍之介や直哉を読んでいるかいないかは別として、このごろの学生の読書量は絶対的に少ない。学生諸君は、まず最初にこのことを十分に自覚すべきである。そして、がむしゃらに本を読むべきである。私は、学生時代には何を差しおいても本を読むことをすすめる。

読書をすすめると、どんな本を読めばよいかという質問が必ず返ってくる。このごろの学生は素直だし、万事、自分で選ぶという機会を与えられないまま振り分けられ、エスカレーターに乗せられて運ばれてきたようなものであるから、読書にあたっても、このような質問が出るのは当然のことかもしれない。しかし、この質問は元来、愚かなことである。もともと当人の意欲や好み、読書歴や読書量もわからないのに、だれが適切な指示を与えうるというのか。何を読むかは、つねに自分自身で決めることである。本人でなければ決められないことである。

書物を選ぶ方法はいくらでもある。図書館や書店に足を運んで、たくさんの本を実際に手に取ってみるのもよいだろう。新聞・雑誌の図書紹介や書評を利用する方法もよい。とくに、しかるべき識者の書評や紹介を参考にするときには、一流の書物と出会う機会が多い。何でもそうであるが、読書でも、一流のものにぶつかってみることが大切である。一流のものには、つねにそれが放つ気韻がある。その気韻にふれることは、諸君の人格を高める上で大きなプラスになるだろう。

しかし、何といっても学生時代の恵まれた条件は、まわりに自由に話し合える教師や先輩や友人がおおぜいいるということである。これを利用しないという法はない。ところが、このごろの学生は教師との接触をきわめて苦手としている。その最大の原因は、本を読まなくなったこと、そのため教師と向き合っても話題がつづかないことにある。何事にも元手は必要である。手ぶらで出かけていって何かを得ようというのは虫のよい話である。それに気づいたら、さっそく話題になりそうな本を一冊読み始めることである。

教師の役割は、先輩や友人にも求めることができる。その気になって探せば、自分よりも本を読んでいる先輩や友人は案外いるものである。私の経験をいうと、読書に関して大きなショックを受けた最初の出来事は、旧制高等学校に入学したてのころ、まわりの先輩や友人が哲学、思想、社会科学や芸術についてとうとうと語り議論しあうことであった。それまでは小説類しか読んだことのなかった私はその議論についていけず、もっぱら聞き役にまわらざるをえなかった。そして先輩や友人たちの教養と見識にただただ圧倒されるばかりであった。これは、高等学校に入学できたことで得意満面だった私には大きなショックであり、屈辱でさえあった。少しでも彼らに追いつき、話の中に入るためには、私はとにかく本を読まなければならなかった。そして、時にはいい顔をしようとして、読み終えたばかりの本について、いかにも以前から愛読していたかのように語り始め、議論しているうちに、たちまち化けの皮がはがされて大恥をかいたこともある。しかし、こういう見栄半分の読書でも、けっして無駄ではなかったと思う。読書の習慣を身につけることができたし、読書の領域が一段と広がった。

読書をある程度までつづけると、本の読み方というものが解り始めてくる。読書の神髄は、記号としての文字を突き抜けて、いわば思想としてのことばを読むことだと思う。そして、そのためには著者がつきつけてくる思想の重みに耐えなくてはならない。本を読むということは、けっして安易なことではない。読書は気楽な暇つぶしではできない。努力が必要だし、初めは一種の苦痛さえともなう。時間もかけなくてはいけない。だからこそ、学生時代に何を差しおいても本を読めとすすめるのである。そして、読んだら語れ。語ることは読書をつづけるためにも、また読書の質を高めるためにも最高に有効な方法である。この点でも、学生時代は話し相手に事欠かないという、すぐれた利点をもっている。

読書の成果が、ただちに目に見えるような形で何かに役立つということは少ないかもしれない。しかし、読めば確実に知識は増すし、新しい世界が開けてくる。そして、それが諸君を人間的に豊かにし、諸君に重みを加えるのである。この人間的な豊かさと重みの価値は、歳をとるにつれて痛切に感じるようになるものである。

（本稿は扇谷正造他『学生時代は何をすべきか』講談社の中の拙稿の一部に加筆したものである。）

書物が帰ってきた

船　引　真　吾

私は昭和20年8月15日の終戦日を外地である朝鮮の京畿道水原郡水原邑、京城（いまのソウル）から南約50㎞の町にある朝鮮総督府農業試験場でむかえた。身分上では昭和21年6月3日の勅令第287号により自然退官になっているが、要するに引揚者である。引揚者はヤミ船で帰った人以外は背にはリュックを、それと両手に持てる物以外は持ち帰れない。当然のことながら生活に必要な衣類と何日かかるか判らないが旅の間の食糧だけになる。その引揚者である私がかなりの量になる学術雑誌と書物、研究資料を持ち帰ったのであるからまさに奇蹟的なできごとである。

試験場には西湖というかなり広い貯水池があり、その向い側に幹線の鉄道が走っている。最初に京城の龍山にいた1ヶ師団の軍隊が引揚げたあと、計画に従って引揚者をのせた貨車が続く。客車はすべて米軍軍政庁が使っていた。水原の町は人口約3万、このうち日本人は3千人だったと思うが10月30日に引揚げることに決った。大量の家財道具一切を研究室の職員に引取ってもらったが、まだ子供たちの普段着や靴など散乱している最中に、米軍軍政庁から朝鮮中央農業技術顧問として残留を命じるということになった。試験部化学科長であった私と、作物関係の和田滋穂、高橋昇の両技師、畜産の内田幸夫技師、お三方とも先輩で東大出身、それにどうしたことか庶務の黒沢松樹氏の5名である。いつ出産してもおかしくない家内が小学校3年の長男、1年の次男、5歳の三男と2歳の長女の手をとって帰った。小さなリュックを背にした娘の姿がいまでも目の前に浮んでくる。

試験場には司政官（Officer in charge）として空軍小佐のシェンバー氏と海軍士官のオースチン博士が着任。オースチン博士は鳥類学者で昼間はジープで鳥を捕り夜は剝製にしていた。京城から鳥に関する雑誌を持ち帰り翻訳を頼まれた。私が写真の現像、焼き付けをすることを知り大変喜んだ。氏は帰国したあと日本に来て天然資源局にはいり、カスミ網による鳥の捕獲を禁止された。上京したおり訪ねたら抱きついて歓迎して下さった。

技術顧問といっても殆ど仕事がない。1月だったと思うが李承晩大統領が試験場に初めて来られ、私達5人もお迎えに並んだ。場長は九大農学部大正14年卒の桂応祥氏で、早く帰してくれと話に行ったが、まあ3年ぐらいは居てくれというのでがっかりした。間もなく場長排斥運動がおこり退いた。のち北朝鮮に帰られだようである。

日本からの便りが全くないのには困った。昭和21年2月の寒い日、恐らく零下10℃ぐらいの時に、5人揃ってはじめて水原駅前の郵便局を訪ねた。ご苦労さんですと丁寧に迎えられたが便りは来ていない。そこで町の中央にある本局を訪ねたところ何と私宛に1通のハガキが届いていた。若い湯川敬夫君からのもので私の家族が無事元気にしていること、11月16日に子供が産まれたことが記してあったが、男か女か判らない。それでも凱歌をあげて帰り、毎晩の酒だがとくに美味かった。この5人は内田氏宅で兄弟のように一緒に暮していた。湯川敬夫君は場長であり九大農学部教授を兼任しておられた湯川又夫先生の令息で、山口大学農学部教授となり数年前退官された。

日本からハガキが出せるなら、朝鮮からも出せる筈だということになり、さらに第3種の雑誌もということで土壌肥料学会誌を送ってみた。それが着いたのである。それからというものは高橋先生は毎日書いておられた膨大な資料を、私は学会誌と、京城丸善支店から求めた洋書の表紙をとり丹念にほどいたもの、これを大型封筒に入れて送った。毎日が封筒つくりである。

ある日オースチン博士が血相を変えて現われ、京城の郵便局に君達の大きな包みがあったと言って大目玉をくらった。その包みの内容が日本に着いたかどうかは判らない。高橋昇博士の遺稿は落合秀雄氏のところで保管されており、長男がリュックで運んだものは松山で製本した。正に書物が帰ってきたのである。家財一切は離しても私費で買い集めた書籍だけは最後まで手許に残していた。それが海を渡って再び松山に現われた。

3月ごろになり38度線が怪しくなったのだろうか。司政官の2人が帰ろうと言い出した。そのあと水原農科大学の学生2人が夜訪ねてきて、日本は増大する人口を養うために必死になって増産技術の研究を進めるだろう。朝鮮も同様である。どうぞ連れて行ってくれと言うのを断った。彼等はいまどうしているだろうか。水原農科大学長の趙伯顕先生（現在韓国学術院会員、九大農化1回卒）から講義を頼まれ、一番若い私がやらされた。朝鮮の土壌と肥料について2日間講義をしたあと、学生と大学・試験場の畑・水田を廻り土の見方を話した。最後に西湖の堤、祝萬堤とよんでいたが、そこで学生諸君と横になり、流れる雲を眺めていた。朝鮮における日本人としての最後の講義であったと思う。あの学生諸君も、韓国の農学発展に働いているだろう。（愛媛大学名誉教授）

※上記の貴重な体験による資料の一部を、農学部分館に寄贈していただきました。

第31回国立大学図書館協議会総会

本年度は中国四国地区を当番地区とし、愛媛大学が会場館となって、6月14日(木)～15日(金)に松山市で開催した。

全国の国立大学附属図書館95館とオブザーバーとして3機関から219名の参加者があり、文部省から占部情報図書館課長、倉橋専門員、大埜係長が列席された。

第1日目の午前は、裏田会長（東大）の開会の辞、愛媛大学の坂上学長の挨拶、会場館の星島館長の挨拶があり、次いで総会議長団〔吉岡館長(東北大)、国分館長（香大)、高野館長（九大)〕が選出され、経過報告と協議事項の審議が行われた。午後は、新理事会の報告、文部省所管事項の説明があり、続いて研究集会に移った。

研究集会〔座長：西原 館長（京大)、野町 館長(高知大)〕では、メインテーマ「文献情報センターの設置に伴う各大学図書館の今後の業務のあり方について」のもと、文献情報センター、RC館及びML館の立場でそれぞれ発表があった。

(1) 東京大学文献情報センターの目録システム
—システム構築の課題—
東京大学文献情報センター
講　師　安達　淳
目録情報掛長　永田治樹

(2) 大阪大学附属図書館の場合
—文献情報センターの業務開始に対応するRC館としての今後の業務の進め方等について—
大阪大学附属図書館
図書館専門員　伊藤祐三

(3) 九州芸術工科大学附属図書館の場合
—文献情報センターの業務開始とML館の現状及び今後の業務の進め方について—
九州芸術工科大学附属図書館
運用係長　栗山　平

第2日目の午前は、第1分科会（運営・サービス）と第2分科会（予算・人事）の2分科会に分かれて協議が行われた。

第1分科会〔主査：市川館長（東工大)、柘植館長（名大)〕では、各地区から提出された次の議題について協議が行われた。

(1) 文献情報センターの設置に伴う地域ネットワークの形成について（北海道地区）
(2) 学術情報センターの早期実現について（東北地区）
(3) 文献情報センターにおける学術情報システムの構成機能に対応した大学図書館のなすべきことについて（関東地区）
(4) 文献情報センターの充実ならびに大学図書館ネットワーク化の促進について（東京地区）
(5) 学術情報システムと国立大学附属図書館の規模・内容等に即応したコンピュータの設置について（東京地区）
(6) 図書館サービスにおける相互協力体制の制度化（北信越地区）
(7) 学術雑誌（バックナンバー）の保存対策（酸性紙問題を含む）及び利用の共同化について（東海地区）
(8) 文献複写の依頼について（近畿地区）
(9) 図書館業務電算化の早期実現について（近畿地区）
(10) 文献情報センターのサービス試行に対応する各大学図書館の業務のあり方等について（中国四国地区）
(11) 学術情報センター早期設置について（九州地区）

第2分科会〔主査：郡司館長（筑波大)、坂口館長（宮崎医大)〕では、次の議題について協議が行われた。

(1) 電算化推進・運用のための要員の研修について（北海道地区）
(2) 学術情報資源の確保充実について(東北地区)
(3) 自然系外国雑誌購入費の削減回復について（関東地区）
(4) 図書館職員の資質向上について（関東地区）
(5) 各大学における図書館経費（学内措置）の配分方式について（東京地区）
(6) 定年制の施行（昭和60年3月31日）に伴う欠員不補充措置の緩和について（東京地区）
(7) 図書館資料、特に外国雑誌及び高額二次資料の購入増額について（東海地区）
(8) 図書館維持費の増額について（近畿地区）
(9) 電算化要員の養成、確保について（中国四国地区）
(10) 学術情報システムに対応する図書館職員の研修について（九州地区）

午後は、全体会議が開かれ、各分科会の報告と質疑応答があり、文部省からの説明があった。

議事終了後、次期会場館名古屋大学柘植館長の挨拶、裏田会長の閉会の辞があり、次いで横浜国立大学藤田館長から今総会を最後に、定年退官される裏田会長に対して謝辞が述べられた。最後に会場館の星島館長の挨拶があり、2日間の総会の全日程を終了した。

全国会議の会場館としての役割を無事に果たすことができましたことは、偏に関係各位の御協力によるものと深く感謝いたしております。

全国共同利用図書資料（大型コレクション）の紹介 (2)

昭和58年度までに、各国立大学で購入している全国共同利用図書資料（大型コレクション）は、下記の通りです。（昭和53・54年度分は「図書館だより」10号を参照して下さい）

なお、利用方法等については参考調査係（内線3222）にお尋ね下さい。

北海道大学

- 英国初期文芸誌コレクション
- 英国外務省外交記録、ロシア・ソ連関係文書
- 基礎法学並びに一般史関連コレクション
- ソ連の対外関係に関するエプシュタインの蔵書
- ロシア亡命文学コレクション

北海道教育大学

- 英国議会教育関係議事録
- 英国教育史コレクション（1850～1965）

小樽商科大学

- モニトウール・ユニヴュルセル紙（1789～1832）

帯広畜産大学

- 日本帝国統計年鑑　明治15年（第1回）～昭和15年（第59回）

弘前大学

- 初期英語テキスト協会出版物

岩手大学

- 府県統計書集成

東北大学

- アメリカ各州判例集
- 19世紀英国議会報告
- 米国連邦議会委員会刊行物総集成（1971～1981）
- 米議会・委員会刊行「諸種報告書・文書総集成」（1903～1934）

宮城教育大学

- 故平間初男氏所蔵教育関係図書

秋田大学

- 児童発達、精神病学及び心理学古典コレクション

山形大学

- 上杉文書

茨城大学

- 英国政府刊行統計集成（1801～1967）

図書館情報大学

- ＮＴＩＳ研究レポート：図書館情報学編（1968～1976）
- ロシア・ソ連書誌：図書館学資料集成
- 図書館情報学関係学位論文集成（1930～1980）
- 英国図書館研究開発部レポート集成（1965～1983）

筑波大学

- キリシタン関係書籍コレクション：ベッソン氏コレクション　16～18世紀刊行
- バウハウス双書と展覧会目録コレクション
- 旧メキシコ大統領ディアス旧蔵コレクション（19世紀前半～20世紀初頭）
- 国家社会主義法（1933～1945）

宇都宮大学

- 世界農林業センサス

群馬大学

- 柳営日次記

埼玉大学

- 政治学基本文献集成
- 経済統計基本文献集

千葉大学

- イギリス・ルネサンス期の知体験を再現する叢書
- ゲルマン史料集成
- 米国経済基本統計資料集
- フランス史資料集

東京大学

- 民国時代公文書資料
- 舌耕文芸関係資料
- 英国政府刊行物コレクション
- 米国連邦議会資料集
- デルゲ版チベット大蔵経
- カナダ判例・法令集

東京医科歯科大学

- ルーヴィエール文庫

東京外国語大学

- モンゴル大蔵経
- ペルシャ研究基本文献コレクション
- 朝鮮日報（1921年9月～1979年12月）

東京学芸大学

○英国教育学文献集成
○フランス教育学集書
○ロシア・ソビエト教育研究雑誌コレクション
○ヘボンその他外国人編さんによる日本語・東洋語辞書集成（幕末～明治期）

東京農工大学

○農業教育用視聴覚資料

東京芸術大学

○交響曲作品集成（1720～1840）
○音楽学学位論文集（1973～）

東京商船大学

○米国海事関係裁判判例集（1923～1955）
○運輸問題関連文献集成（1921～1971）
○ロイド海事判例集

お茶の水女子大学

○女性の歴史
○女性史コレクション

横浜国立大学

○中国方志叢書
○世界各国地図帳集成
○ミラボー伯著作・資料集

新 潟 大 学

○欧州各国公式経済統計資料（1941～1970）
○科学史関係文献コレクション
○上 杉 文 庫

長岡技術科学大学

○工学・技術政策関係文献

上越教育大学

○心理学研究論文抄録（1927～1978）
○音楽教育学位論文集（1971～1980）

富 山 大 学

○承政院日記

金 沢 大 学

○注釈付州主題別法令集（U.S.A.）
○仏議会議事録（1787～1794）
○独議会議事録（1949～1980）

福 井 大 学

○ハクリュート協会議書

山 梨 大 学

○障害者の社会参加映画
○文部省選定社会教育映画　体育・レクリエーション編

信 州 大 学

○アメリカ合衆国経済関係官庁及び行政委員会資料

岐 阜 大 学

○静嘉堂文庫

静 岡 大 学

○国際連盟関係コレクション

名古屋大学

○イギリス近代思想史原典コレクション：第Ⅰ期ホッブズとその時代
○イギリス近代思想史原典コレクション：第Ⅱ期イギリス近代思想の諸潮流
○18・19世紀ヨーロッパ総合雑誌集成
○英国近世初期書籍集成（1475～1640）
○チベット仏教全書

愛知教育大学

○トレブナー古典叢書
○保健体育、レクリエーション研究文献集成

三 重 大 学

○明治、大正、昭和期土地経済及び経済統計資料

滋 賀 大 学

○アメリカ産業会議刊行物

京 都 大 学

○ペルシャ語イラン文献資料集成
○ワイマール共和国時代の文献コレクション
○ゴールドスミス、クレス図書館所蔵経済文献集成
○デルゲ版チベット大蔵経
○19世紀英国下院議会文書

京都工芸繊維大学

○ポスター専門誌（1898～1901）
○メンドロン編著「絵入りポスター」
○ヤン・トーロップに関する研究資料

大 阪 大 学

○ユダヤ研究コレクション
○欧州各国公式経済統計資料（1841～1970）
○法学及び国際法関係図書コレクション
○国際条約集成（1648～1918）
○赤木文庫蔵「古浄瑠璃」コレクション（1633～1719）

大阪外国語大学

○北欧の民俗学、歴史関係コレクション
○イタリア史資料集成

○イタリア著作家叢書
○ロシア・スラブ言語関係コレクション
○インドネシア現代史政治資料集成(1940～1970)

大阪教育大学

○知性（旧誌名：学校と社会）

兵庫教育大学

○全米カリキュラム資料集
○アメリカ教育関係コレクション（1960～70年代）

神戸大学

○米国議会全刊行物（1970～1976）
○国連公式記録集
○米国教育教政局報告書（1870～1917）
○米国主要会社年次報告書（1844～1978）
○ＳＥＣ届出10—Ｋ年次営業・財務報告書(ニューヨーク証券取引所分)
○株主向年次報告書(ニューヨーク証券取引所分)
○米国議会委員会刊行物（1911～1969）

神戸商船大学

○近世の廻灌史料（東北編）
○ハクルート協会探検航海記録
○太平洋航海記集

奈良教育大学

○ドイツ・スポーツ教育学コレクション

奈良女子大学

○都市問題博士論文集

和歌山大学

○心身障害者の社会参加と平等に関するコレクション

鳥取大学

○四部分類叢書集成
○コロンビア大学教育学部・教育学寄稿論文集

島根大学

○ドイツ最高裁判所全判例集セット

島根医科大学

○人口動態統計　昭和21～55年

岡山大学

○ドイツ歴史史料集成
○グローズ・シレー判例集

広島大学

○ドイツ大学史コレクション
○教育資源情報センタードキュメント
○教育科学学位論文に関するコレクション（1945～1980）

山口大学

○四庫全書珍本
○米国議会経済合同委員会報告書（1950～1979）
○ルネッサンス期英国百科叢書

香川大学

○アメリカ合衆国連邦裁判所判例集
○フランスの哲学評論

愛媛大学

○世界経済コレクション

高知大学

○中国社会思想史コレクション

九州大学

○米国判例体系
○石崎文庫蔵本
○欧州各国公式経済統計資料
○註釈付米国各州法令集
○英国議会議事録
○英国政府刊行物非議会刊行物（1922～1977）
○近世後期戯作類コレクション
○百部双書集成
○ファイナンシャル・タイムズ誌

九州芸術工科大学

○都市計画研究コレクション（20世紀）

佐賀大学

○東寺百合文書

長崎大学

○巨大企業・経済集中関係資料

熊本大学

○旧幕府引継書
○シンテーズ文庫
○民国20年代中国大陸土地問題資料

大分大学

○中世教会史叢書
○大正新脩大蔵経

鹿児島大学

○シボガ学術探検報告
○チャレンジャー号海洋探検学術研究報告（1872～1876）

琉球大学

○アメリカ公民権闘争の歴史資料
○アメリカ連邦教育局公報

昭和58年度 愛媛大学附属図書館統計

蔵書冊数

区分	和漢書	洋書	計
本館	398,956冊	134,140冊	533,096冊
医分館	23,267	26,418	49,685
農分館	57,222	13,359	70,581
計	479,445	173,917	653,362

増加冊数

区分	和漢書	洋書	計
本館	16,489冊	7,285冊	23,774冊
医分館	1,096	1,771	2,867
農分館	1,546	455	2,001
計	19,131	9,511	28,642

受入雑誌種類数

区分	和雑誌	洋雑誌	計
本館	2,121種	1,241種	3,362種
医分館	529	412	941
農分館	1,007	408	1,415
計	3,657	2,061	5,718

開館日数・入館者数

区分	開館日数	入館者数
本館	341日	373,820人
医分館	296	59,556
農分館	299	12,140
計		445,516

貸出冊数

区分	教職員	学生	その他	計
本館	2,591冊	68,813冊	408冊	71,812冊
医分館	8,407	9,488	43	17,938
農分館	442	4,188	92	4,722
計	11,440	82,489	543	94,472

貸出人数

区分	教職員	学生	その他	計
本館	1,415人	41,389人	187人	42,991人
医分館	6,260	6,600	26	12,886
農分館	241	3,621	20	3,882
計	7,916	51,610	233	59,759

研究室貸出冊数

本館	17,595冊
医分館	1,342
農分館	1,212
計	20,149

学内文献複写処理件数

本館	1,419件
医分館	8,133
農分館	628
計	10,180

学外文献複写依頼件数

区分	大学図書館	その他	計
本館	1,926件	219件	2,145件
医分館	3,983	32	4,015
農分館	415	12	427
計	6,324	263	6,587

学外文献複写受付件数

区分	大学図書館	その他	計
本館	1,177件	52件	1,229件
医分館	1,128	219	1,347
農分館	173	15	188
計	2,478	286	2,764

愛媛大学附属図書館委員会

昭和59年度第1回附属図書館委員会
日　時：9月12日（水）15：00～16：00
議　題
(1) 昭和58年度学生用図書費及び後援会図書費の支出結果、並びに昭和59年度学生用図書の推薦依頼について
　昭和58年度の購入状況並びに昭和59年度の推薦額について説明があり、審議の結果原案通り了承された。
(2) その他
(イ) 学術雑誌集中管理について
　学術雑誌の集中管理についての現況説明があり、今後の協力方について依頼があった。
(ロ) 松山市立市民中央図書館（仮称）設立に伴なう選書依頼について
報告事項
第31回国立大学図書館協議会総会について

愛媛大学附属図書館委員会委員

（　）内は任期

附属図書館長	星島一夫	(昭61. 3.31)
医学部分館長	志賀　健	(昭61. 9.30)
農学部分館長	稲岡　恵	(昭61.10.31)
法文学部	美山　靖	(昭60. 3.31)
	東平好史	(昭61. 3.31)
教育学部	柳田征司	(昭60. 3.31)
	白方　勝	(昭61. 3.31)
理学部	野田善郎	(昭60. 3.31)
	棚部一成	(昭61. 3.31)
医学部	樺澤　泉	(昭60. 3.31)
工学部	岸　洋介	(昭60. 3.31)
	松木三郎	(昭61. 3.31)
農学部	徳増　智	(昭60. 3.31)
教養部	中安ちか子	(昭60. 3.31)
	池田洋司	(昭61. 3.31)
事務局長	滝沢源平	

お知らせ

○ 愛媛大学記念文庫について

本欄で毎号お知らせしている愛媛大学記念文庫図書は、本学の開学10周年記念事業として、昭和34年に図書館に設置された「愛媛大学記念文庫」に御寄贈していただいている図書です。

この文庫の目的と趣旨は、本学教官の著作図書論文等の刊行物を刊行の都度御寄贈願って、その研究業績の顕彰と文庫の充実を図ることにあります。

本文庫は25年を経過し、御寄贈いただいた著作物は現在340冊になっており、図書館1階の研究者閲覧室に展示し、利用されています。今後も引き続き、本文庫の発展と充実を図りたいと思いますので、著作物を御出版の節には1部御恵贈賜わりますようお願いいたします。

なお、御寄贈いただける場合は、受入係（内線3213）まで御連絡下さい。

昭和59年2月から8月までの間に御寄贈いただいた図書は次のとおりです。

小野　捷
　英語時間副詞節の文法　英宝社　1984
星島　一夫
　現代地域の賃金問題　愛媛労働問題資料センター　1979
川本　臥風
　芬泉　いたどり発行所　1984
　芬泉（続）いたどり発行所　1984
　ゲーテと鷗外　川本臥風著作刊行会　1984
　宗教随想　睡蓮　〃　1984
　川本臥風句集　雪嶺　〃　1984
　句集雪嶺　別冊　俳論紀行　〃　1984
奥田　拓道
　脂肪のつまみ出し　主婦と生活社　1984
野崎　亨
　分析化学における起泡分離　名古屋大学　1984
金藤　泰伸
　高度経済成長の代償　青葉図書　1984

○ 学生希望図書について

昭和59年4月から59年9月までに購入した学生希望図書は次のとおりです。

- 入門価格理論
  倉沢資成著　日本評論社　1983
- 国際政治・国際法の基礎知識
  浦野起史他著　北樹出版　1983
- 私のみた日本外交
  石川忠雄著　慶応通信　1976
- 現代外交の分析
  坂野正高著　東京大学出版会　1971
- 図解国際公法
  経塚作太郎著　立花書房　1977
- 答練国際公法
  経塚作太郎他著　学陽書房　1979
- 数値解析
  一松　信著　朝倉書房　1983
- 高次元の正多面体
  一松　信著　日本評論社　1983
- 資本論の読み方
  山口　重克著　有斐閣　1983
- 会計学基礎講座　全6巻
  中央経済社　1982
- 最新原価算算講義
  溝口一雄著　中央経済社　1979
- 経済統計
  溝口敏之他著　東洋経済新報社　1982
- 日本経済
  中村隆英著　東京大学出版会　1980
- 財政学入門
  佐藤　進著　同文館　1981
- 経済統計読本
  森田優三著　東洋経済新報社　1980
- 組合せ構造とグラフ理論
  C. L. リュー著　マグロウヒルブック　1983
- ケインズ一般理論を読む
  宇沢弘文著　岩波書店　1984
- 財政学　全3巻
  マスグレイブ著　有斐閣　1983～84
- リー代数と素粒子論
  竹内外史著　裳華房　1984
- クラース
  J. クーパー著　サンケイ出版　1984
- PC—Technow 9800
  藤田　英時他著　システムソフト　1984
- PC9800　シリーズ操縦法
  三谷政昭著　ラジオ技術社　1984
- 維新史料綱要　全10巻
  東京大学出版会　1984
- 国民所得理論
  宮沢健一著　筑摩書房　1984
- 日本外交政策の史的展開
  大畑篤四郎著　成文堂　1983
- Early Childhood Care and Education.
  OECD　1977
- パラドクスの数理
  B. バンク著　共立出版　1984
- 為替レートと金融市場
  深尾光洋著　東洋経済新報社　1983
- 国際金融市場
  G. ドウフェイ他著　東京大学出版会　1984
- 日本の税金
  和田八東著　日本評論社　1984
- 微分積分学
  伊藤雄二著　朝倉書店　1984
- 新版行政法　下巻
  田中二郎著　弘文社　1983
- 現代国際経済
  楊井克巳他編　東京大学出版会　1984
- 経済人類学序説
  湯浅赳男著　新評論　1984

愛媛大学附属図書館報「図書館だより」
第18号　昭和59年11月15日発行
発行　愛媛大学附属図書館
松山市文京町3番
Tel 0899—24—7111